

和暦	西暦	年齢	いくたかずたか 生田和孝略歴
昭和 2 年(1927)			5月18日、中北條村大字江北にて、父・生田貢、母・勝野の次男として生まれる。
昭和 16 年(1941)	14		4月、鳥取県立倉吉中学校（現倉吉東高等学校）に入学。
昭和 19 年(1944)	17		8月、倉吉中学校を中退、海軍甲種飛行予科練習生として美保海軍航空隊に入隊。
昭和 20 年(1945)	18		3月、石川県の小松海軍航空隊に移る。8月、終戦となり舞鶴にて除隊し帰郷。
昭和 22 年(1947)	20		父の従兄の日本画家・引田逸牛の知己で濱田庄司・河井寛次郎に近い堀尾幹雄の勧めで陶工を志し、河井に師事すべく京都に出る。しかし、河井は仕事を休止していたため五条坂の藤平窯で河井の甥・河井武一の指導を受ける。
昭和 26 年(1951)	24		河井寛次郎のもとに弟子入りし、5年間助手を勤める。この間陶技を向上させ河井や濱田に技量を認められるまでに成長する。
昭和 30 年(1955)	28		河井のもとを離れ、独立して雑器づくりに専念するため一時帰郷。
昭和 31 年(1956)	29		愛媛県砥部町で食器工場を経営する阿部祐工（濱田庄司の弟子）の下で3ヶ月働いた後、兵庫県多紀郡今田町上立杭（現丹波篠山市）の市野利雄の窯に移り、丹波焼の技法を学ぶ。
昭和 34 年(1959)	32		5月、西伯郡日吉津村の田中克子と結婚。市野窯から離れ、下立杭今田町釜屋に築窯し自作を焼成する。11月、「日本民藝館展」に雑器を初めて出品し、入選。
昭和 37 年(1962)	35		東京三越本店の主催で第1回「生田和孝作陶展」を開催。引田逸牛が賛助出品し壁面を飾る。「陶説」9月号において磯野風船子に有望新人と評価される。
昭和 38 年(1963)	36		第37回「国画会展」の工芸部門に初出品。この年より広島市の福屋でも個展を開催。山下碩夫、清水俊彦が助手として入る。
昭和 42 年(1967)	40		「日本民藝館展」に《糠釉鑄手深鉢》を出品し、奨励賞を受賞。山下清志が助手として入る。
昭和 45 年(1970)	43		第44回「国画会展」に《糠釉鑄手深鉢》を出品し、新人賞を受賞。河本賢治が助手として入る。
昭和 46 年(1971)	44		国画会会友に推挙。柴田雅章が助手として入る。
昭和 48 年(1973)	46		6月、第2回「日本陶芸展」の第三部（民芸部門）に《糠釉鑄手大深鉢》を出品、国際交流基金が主催する南米巡回展の作品に選抜。
昭和 50 年(1975)	48		この年より東京都港区南青山のグリーンギャラリーにて隔年制の個展を開催。第3回「日本陶芸展」に《糠釉鑄手大鉢》を出品し、優秀作品賞（文部大臣賞）を受賞。
昭和 52 年(1977)	50		第51回「国画会展」に《飴釉白掛鑄手大深鉢》を出品し、会友優作賞受賞。
昭和 53 年(1978)	51		国画会の会員に推挙。
昭和 54 年(1979)	52		第53回「国画会展」に会員として《飴釉丸壺》を初出品。6月、第5回「日本陶芸展」の特別記念招待作家に選ばれ《糠釉鑄手大鉢》を出品。最優秀作品賞の候補として残るが惜しくも3位となる。瀬戸式登り窯を改築するが失敗。
昭和 55 年(1980)	53		第54回「国画会展」に《海鼠釉面取鉢》を出品。
昭和 56 年(1981)	54		再度、丹波式登り窯に改める。
昭和 56 年(1981)	54		第55回「国画会展」に《柿釉四方瓶》を出品。
昭和 57 年(1982)	55		8月、病気のため入院。「くらしの焼き物展」に《白釉鑄手土瓶》《白釉菊鉢》《飴釉角皿》《白釉鑄手皿》《黒釉鑄手鉢》を出品。 11月4日、逝去。享年55歳。
昭和 58 年(1983)			生前に出品委嘱されていた《糠釉鑄手大鉢》が遺作作品として第1回「全国日本伝統工芸展選抜展」に出品。



生田和孝の手仕事

北栄みらい伝承館
(北条歴史民俗資料館)
〒689-2103
鳥取県東伯郡北栄町田井47-1
TEL 0858-36-4309
HP <http://www.e-hokuei.net/2202.htm>
E-mail h-rekishi@e-hokuei.net

本パンフレットは「2020年度北栄町合併十五周年・企画展 生田和孝の手仕事～鳥取民藝運動に連なる丹波の陶工～」
(主催:鳥取県・北栄町教育委員会、会期:2020年8月8日(土)～9月27日(日)) 開催にあたって作成したものです。

《飴釉白流し鑄大鉢》
1978年 H13.0×φ52.0cm

いくたかずたか
生田和孝コレクション

北栄みらい伝承館では、生田和孝を顕彰するため2010（平成22）年に常設展示室を開設し、コレクションの中から年間3回の展示替えを行いながら公開している。

生田和孝コレクションは、1992（平成4）年、コレクターの川崎忠政氏などから35点の寄贈に始まり、実兄・生田観陽氏が美術館建設のため蒐集していた182点や大谷教育文化振興財団の寄贈を加え現在231点となっている。

生田和孝の足跡をたどると、1927（昭和2）年鳥取県東伯郡中北條村（現北栄町）に生まれるが、陶芸との出会いは終戦後、1947（昭和22）年父の従兄の日本画家・引田逸牛の知己で濱田庄司・河井寛次郎に近い堀尾幹雄の勧めもあり、河井に師事すべく京都に出たことに始まる。河井はこの時期仕事を休止していたため一時河井武一の指導を受けた後、河井寛次郎のもとで5年間助手を務め技術を習得している。

当時、鳥取では吉田璋也を中心に「鳥取民藝協会」が設立されるなど、民藝運動が全国的な広がりを見せ、県中部でも、明倫小学校を会場に、版画家・長谷川富三郎の企画で柳宗悦、濱田庄司、パーナード・リーチが講演を行っている。

河井から独立した生田は、1956（昭和31）年愛媛県の濱田庄司の弟子・阿部祐工のもとで3か月働いた後、兵庫県多紀郡今田町上立杭（丹波）に移り、市野窯で丹波焼の技法を基礎から学び雑器づくりに専念する。1967（昭和42）年日本民藝館展に《海鼠釉鎬手鉢》を出品し奨励賞を受け、この頃から生田の仕事が評価される。また、1970（昭和45）年国画会においては《糠釉鎬手深鉢》で新人賞を、1975（昭和50）年第3回日本陶芸展では《糠釉鎬手大鉢》を出品し、優秀作品賞（文部大臣賞）を受け高い評価を得ている。その後、1982（昭和57）年11月、55歳でこの世を去った。

生田作品の特徴は、昔ながらの丹波の伝統を継承しつつ、轆轤成形した器体に鎬や面取を主に加え、そこに糠釉、飴釉、黒釉などを組み合わせて登り窯で焼成している。その表現の豊かさは、初期から継続して製作されている扁壺に特徴的にみられる。生田が多用する糠釉は、丹波土着のものでなく日本各地の民窯で常々使われていたいわゆる糠白を基本に生田が使いこなしした釉である。生田の郷里で父・貢が作った粗殻灰と土灰を丹波に運んで作られていた。

生田は55歳という若さで逝去したが、生田が積み上げてきた技術と陶芸に対する熱意は9名の弟子たちに引き継がれ、その魅力を今に伝えている。



《柿釉面取瓶》
1975年頃 H27.0×W15.5×D15.5cm



《黒釉面取花瓶》
1970年頃 H37.0×W17.0×D16.0cm



《飴釉面取壺（朝倉山椒壺）》
1968年頃 H21.0×W16.6×D17.5cm



《掛分面取壺》
1971年頃 H29.7×W17.7×D17.5cm
めんとり
面取

面取は轆轤成形の後、生乾きの胎土の表面を削って多面体にする成形技法である。丹波焼の代表的な作品の一つである山椒壺にもこの技法が用いられている。河井のもとで学んだもので、生田の陶業の初期を代表するものである。



《黒釉鎬壺》1976年頃 H32.5×φ15.0cm



《白釉菊文鉢》1977年頃 H8.8×φ43.5cm



《海鼠釉鎬手砵壺》1976年頃 H21.5×φ12.5cm



《黒釉鎬鉢》1973年頃 H8.0×φ21.0cm

しぎ
鎬

鎬とは胎土の表面を削ってできる稜線文様のことで、また、その装飾技法。神戸で見つけた南方支那の酒器の胴部にある鎬文様をヒントに自作の中に取り入れたと言われ、生田の陶業の後期を代表するもの。生田の鎬は帯金を加工した自作の工具を使い、細く勢いのある鎬で作品の景色を整えている。



《黒釉掛流扁壺》
1975年頃 H27.5×W21.0×D14.3cm



《掛分扁壺》
1973年頃 H26.7×W27.8×D19.0cm



《柿釉扁壺》1979年 H19.0×W15.5×D12.5cm



《糠釉面取俵壺》
1973年頃 H18.0×W21.5×D13.5cm
へんこ
扁壺

扁壺は口の造りの小さい壺や瓶の胴を二方から平たく叩いて扁平に成形した形状で、上から見ると断面が楕円又は長方形の形をしている。生田が初期から継続的に手掛けてきた扁壺は、糠釉、飴釉、黒釉、海鼠釉などの釉薬を施し、味わいのある器が多い。



《流掛蓋付井》1976年 H11.8×φ15.5cm



《線彫湯呑》1975年頃 H9.0×φ8.5cm



《黒釉筒描茶器》1977年頃
急須 H10.2×W16.2×D14.0cm 湯呑 H7.3×φ8.0cm



《糠釉線彫文ジョッキ》1963年 H16.2×W17.0×D10.5cm

生活雑器

日本六古窯の一つである丹波は壺、甕、すり鉢など生活雑器を作り続けてきた歴史がある。生田は河井寛次郎から離れ伝統的な丹波の技法を学び、「展覧会でほめられるより、台所でほめられたい」と多くの雑器を作った。最盛期には年間12回登り窯に火を入れている。



《自然釉水指》1974年頃 H18.0×φ16.5cm



《粉引茶碗（御本手茶碗）》
1973年頃 H6.0×φ16.4cm



《鉄釉竈面取茶碗》
1965年頃 H9.8×W9.8×D10.0cm



《海鼠釉茶碗》1975年頃 H7.5×φ12.1cm

ちやとう
茶陶

丹波焼では、江戸時代前期に小堀遠州らの指導で「遠州丹波」称された茶碗、水指、茶入など名器が数多く誕生している。生田はその歴史に学び、窯の近くで産出される「ダット岩」から採取した土を杵で叩き大きな石を取り除き胎土として、茶碗、水指、建水など数多く製作している。